

## 第2節 留学魅力度5カ国比較

### 1. 5カ国の魅力度の加重平均による比較～一般学生と日本語専攻学生の項目毎の比較～

表2-2-1 一般学生

設問		米国	英国	豪州	日本	韓国
A	大学の知名度	4.8	4.4	3.5	3.3	2.7
B	教育の質	4.6	4.3	3.4	3.4	2.8
C	雇用の展望	4.4	3.9	3.5	3.2	2.9
D	授業料の安さ	3.1	2.9	3.2	3.0	3.1
E	奨学金の充実	4.2	3.6	3.6	3.2	2.9
F	生活しやすさ	3.5	3.3	3.4	3.0	3.0
G	生活の安全	3.1	3.5	3.6	3.1	3.1
H	成熟した経済社会	4.4	4.1	3.8	3.7	3.2
I	大衆文化	4.2	4.0	3.5	3.6	3.4
J	言語的負担少	4.1	4.0	3.7	3.2	3.0
K	入国ビザの取得	3.4	3.2	3.4	3.2	3.1
L	入学しやすさ	3.3	3.2	3.3	3.1	3.0
M	親族・知人の人脈	2.4	2.2	2.2	2.2	1.9

図2-2-1 5カ国の設問ごとの加重平均の比較(一般学生)

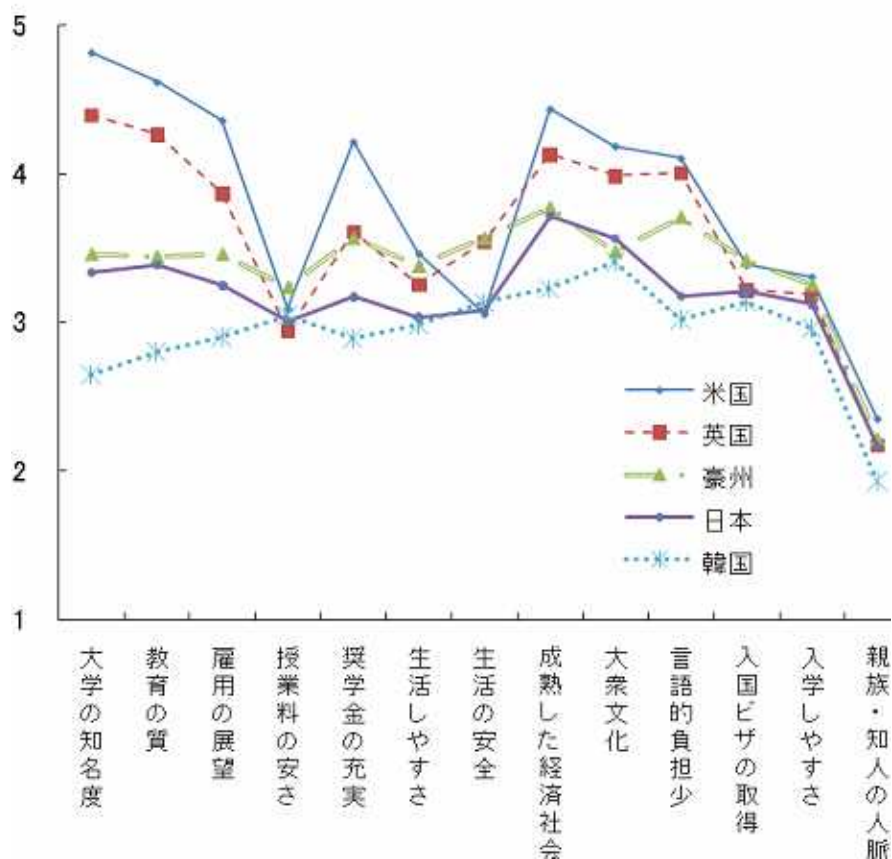
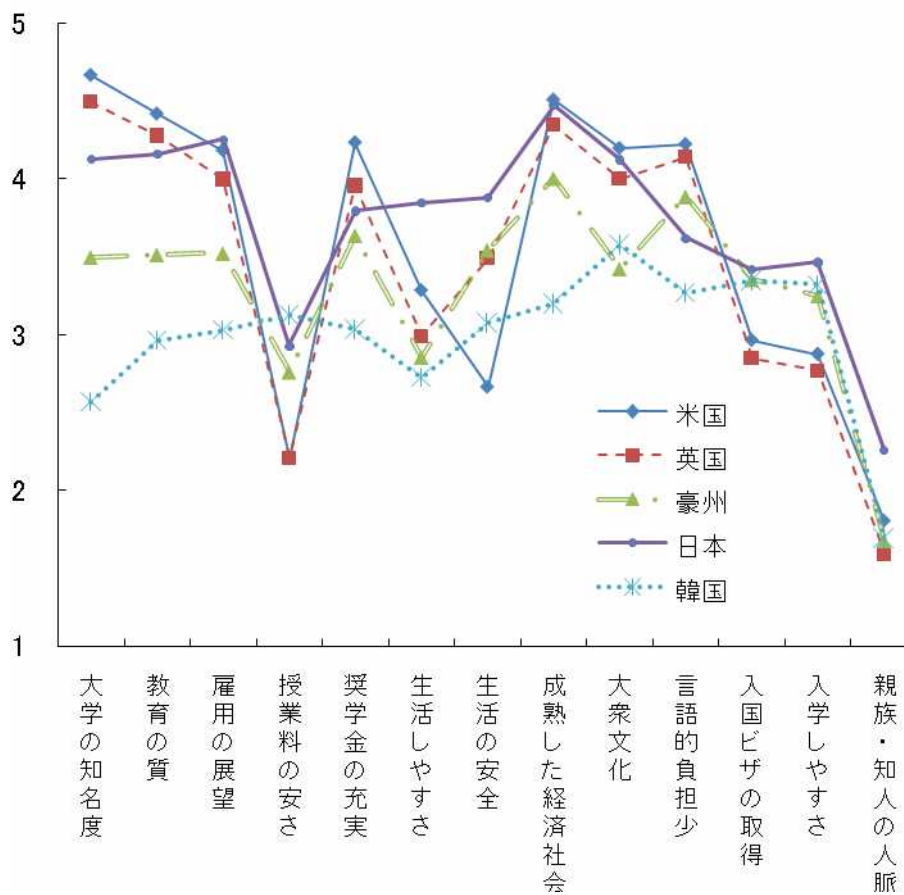


表 2 - 2 - 2 日本語専攻

設問	米国	英国	豪州	日本	韓国
A	4.7	4.5	3.5	4.1	2.6
B	4.4	4.3	3.5	4.2	3.0
C	4.2	4.0	3.5	4.3	3.0
D	2.2	2.2	2.8	2.9	3.1
E	4.2	4.0	3.6	3.8	3.0
F	3.3	3.0	2.9	3.8	2.7
G	2.7	3.5	3.5	3.9	3.1
H	4.5	4.4	4.0	4.5	3.2
I	4.2	4.0	3.4	4.1	3.6
J	4.2	4.1	3.9	3.6	3.3
K	3.0	2.9	3.4	3.4	3.4
L	2.9	2.8	3.3	3.5	3.3
M	1.8	1.6	1.7	2.3	1.7

図2-2-2 5カ国の設問ごとの加重平均の比較(日本語専攻)



本節では、中国人学生からみた米国、英国、豪州、日本、韓国 5 カ国の留学先魅力度としての違いを比較検討する。調査は、中国人の一般学生と日本語専攻学生に分けておこな

った。上記図表 2 - 2 - 1 が一般学生の調査結果であり、図表 2 - 2 - 2 が日本語専攻学生（日学）の調査結果である。数値は 5 件法による評価尺度の平均得点である。点数は 1 ~ 5 になっており 5 点に近い方が評価は高い。

#### A. 大学の知名度や学位

一般学生の「A. 大学の知名度や学位」で最も評価が高いのは、米国 4.8 である。次いで英国 4.4、豪州 3.5、日本 3.3、韓国 2.7 と続く。ポイント差を比較すると、米国と英国の差は 0.4 であるが、英国と豪州の差は 0.9、豪州と日本の差は 0.2、日本と韓国の差は 0.6 である。最も高く評価されている米国（4 点台後半）、次いで高い評価の英国（4 点台中盤）、中評価の豪州と日本のグループ（3 点台）、それに低評価の韓国（2 点台）と大きく 4 つのグループに分けられる。一般学生の評価で、日本の評価が米国と英国には及ばないとしても、豪州と近接していることは注目してよい。

日本語専攻学生の「A. 大学の知名度や学位」でも、最も評価が高いのは米国 4.7 であるが、2 番目の英国 4.5 との差（0.2 差）が一般学生（0.4 差）に比べると小さい。その後、日本 4.1、豪州 3.5、韓国 2.6 と続いている。日本語専攻学生も米国と英国を高く評価しているが、それに続いて日本の大学の知名度を評価している点で（米国から日本までは 4 点台）、一般学生の順位と異なっている。日本語専攻学生であるから当然とも言えるが、豪州より 0.6 ポイント高く日本を評価している。韓国については日本語専攻学生においても最も低い評価である。

#### B. 教育の質の高さ

一般学生の「B. 教育の質の高さ」では、最も評価が高いのは、米国 4.6 である。次いで英国 4.3、豪州 3.4、日本 3.4、韓国 2.8 と続く。ポイント差を比較すると、米国と英国の差は 0.3 であるが、英国と豪州の差は 0.9 と大きく、豪州と日本は同じ、日本と韓国の差は 0.6 と比較的大きい。「大学の知名度や学位」と同じく、米国の最高評価に変わりはなく、英国は米国との差（0.3 差）が「知名度・学位」の項目（0.4 差）とほぼ同じで高評価（4 点台）である。豪州と日本が中評価（3 点台）で、低評価（2 点台）の韓国と 3 つのグループに分けられる。教育の質の評価に関して、中国の一般学生から見ると、日本の教育は豪州と同程度ととらえられており、米国や英国ほど高くはないが、決して低くはないと言うことがいえよう。

日本語専攻学生の図表で「B. 教育の質の高さ」の項目を見ると、最も評価が高いのは、米国 4.4 であるが、2 番目の英国 4.3 との差（0.1 差）が一般学生（0.3 差）に比べると小さい。次いで、日本の 4.2（英国との差が 0.1）、豪州 3.5、韓国 3.0 と続く。「大学の知名度や学位」と同様、「教育の質の高さ」においても、日本語専攻学生は米国と英国を高く評価しているが、それに続いて日本の教育の質を高く（ほぼ同等に）評価している点で（米国から日本までは 4 点台）、一般学生の順位と異なっている。特に日本と豪州のポイント差は 0.7

と比較的大きく、豪州と韓国の差は 0.5 である。

一方、韓国については、近年、特に中国との経済的関係の緊密化から、中韓間の留学生交流が活発化しているといわれるが、上記の通り「大学の知名度や学位」や「教育の質の高さ」の点では、中国人学生からみて韓国の大学の評価は低く、韓国留学への動きが必ずしも韓国の大学教育に魅かれてのものではないことが読み取れる。

### C. 雇用の展望

次に、「C. 雇用の展望」の評価項目を見てみよう。まず、一般学生で最も評価が高いのは米国 4.4 であり、次いで英国 3.9、豪州 3.5、日本 3.2、韓国 2.9 と続いている。米国と英国のポイント差は 0.5、英国と豪州のは 0.4、豪州と日本の差は 0.3、日本と韓国の差も 0.3 である。大学卒業後、つまり学業を修めた結果として、雇用機会を求めるのが一般的であることを考えれば、雇用の展望に対する評価と大学の知名度や教育の質の評価が一致するのは、ある意味当然といえる（特に一般学生について）。

日本語専攻学生に「C. 雇用の展望」の評価を聞くと、最も評価するのは日本 4.3 であり、次いで米国 4.2、そして英国 4.0、豪州 3.5、韓国 3.0 と続いている。ポイント差は、日本と米国で 0.1 とほとんど差がなく、米国と英国の差も 0.2 で小さい。この 3 カ国が接近して上位（4 点台）を占めている。英国と豪州のポイント差は 0.5、豪州と韓国の差も 0.5 である。日本語を専攻（修得）することが、就職の面で有利になるという意識を持っていると思われるので、この結果は当然でもあるが、それと同程度の高い評価を米国と英国への留学に対してもしていることがわかる。

### D. 授業料の安さ

次に「D. 授業料の安さ」の評価を一般学生で見たい。5 カ国と中国との経済格差を反映して、全体的に評価が低い（4 点台がない）。最も評価が高いのは豪州 3.2 であり、次に米国 3.1、韓国 3.1 と続き、日本 3.0、英国 2.9 である。これまでの「大学の知名度や学位」「教育の質の高さ」「雇用の展望」と明らかに評価順位が異なっている。しかし、最も評価の高い豪州 3.2 と最も評価の低い英国 2.9 のポイント差は 0.3 しかなく、5 カ国間にほとんど差がないことに注目しておく必要がある。豪州が「授業料の安さ」で最も高い評価を受けているが、これが客観的事実を正確に反映しているかどうかは別にして、為替レート等の影響も含め、そうした印象で受け止められていることはわかる。また、豪州の大学や留学関係機関が、豪州留学キャンペーンの一環として、同じ英語圏の米国や英国よりも授業料が安いことを比較広告的に強調していることの効果が出ているという見方もできるであろう。

日本語専攻学生の「D. 授業料の安さ」に関する評価も全体的に低く、最も評価が高いのは韓国 3.1 であり、次いで日本 2.9、豪州 2.8、米国と英国が 2.2 で並んでいる。日本語専攻学生の場合、最高評価の韓国と最低評価の米国及び英国のポイント差は 0.9 で、一般学生

の0.3より大きく開いている。この5カ国の順位は実際の各国の平均的な授業料の順位と一致している。3番目の豪州と4番目の米国及び英国の差がある程度開いていることも為替レートを考慮すれば、実態を反映しているといえる。これらのことから、日本語専攻学生のほうが一般学生に比べ、海外志向が強く、授業料をはじめ海外の大学に関する情報や為替レートについて正確な知識をもっているのではないだろうか。

また、見方を変えると、この「授業料の安さ」については次のように指摘することもできよう。従来、日本留学の障壁の一つとして、費用の高さがあげられることが多かった。しかしながら、本調査によれば、中国人学生は米国や英国も、日本と同等か、あるいはそれ以上に費用の点では高いという評価をしていることがわかる。すなわち、費用面ではあまり違いを感じていないにもかかわらず、米国や英国に比べて日本への留学が全体的には下位に位置づけられている点は留意すべきであろう。

#### E. 奨学金の充実の程度

一般学生の「E. 奨学金の充実の程度」に関する評価は、最も高いのが米国 4.2 であり、次いで英国と豪州が並んで 3.6、そして日本 3.2、韓国 2.9 と続いている。ポイント差を見ると、米国と英国及び豪州の差は 0.6 と比較的大きく、英国及び豪州と日本の差は 0.4、日本と韓国の差は 0.3 と差が小さくなってきている。ここでも、米国が最も高く評価されており（唯一 4 点台）、中評価の英国、豪州、日本（3 点台）、それに低評価の韓国（2 点台）と 3 つのグループに分けられる。

日本語専攻学生に「E. 奨学金の充実の程度」に関する評価を聞くと、最も高い評価を得たのが米国 4.2 であり、次いで英国 4.0、そして日本 3.8、豪州 3.6、韓国 3.0 と続いている。ポイント差は、米国と英国、英国と日本、日本と豪州がそれぞれ 0.2 差で等間隔になっているが、豪州と韓国の差は 0.6 と比較的大きい。一般学生と日本語専攻学生を比較すると、米国が最も評価されている点は同じであるが（共に 4.2）、日本に対する評価は一般学生が 3.2、日本語専攻学生は 3.8 と 0.6 ポイントの差がある。米国が最も評価されている要因としては、大学院においてアシスタントシップが充実していることが、中国においても広く知れ渡っているからであろう。

こうした「奨学金の充実の程度」をめぐる評価については、あらかじめ日本留学に関する情報が留学希望者の側に十分伝わっているかどうかという点が問題といえる。5カ国中、国費留学生の割合が最も高いのは日本であり、留学生のための授業料減免制度も充実しているという事実がありながら、日本の評価が日本語専攻学生も含めて高くないことは憂慮すべきである。「授業料の安さ」や、「奨学金の充実」といった主観的評価は、インプットされた情報量によって決定される側面が多いということを考えると、奨学金制度そのものの充実はもとより、日本からの留学生向け奨学金情報等、留学生支援情報の提供にさらに注力する必要がある。

## F. 生活しやすさ

一般学生の「F. 生活しやすさ」に対する評価は、最も高いのが米国 3.5 であり、次いで豪州 3.4、英国 3.3、日本と韓国が並んで 3.0 と続いている。ポイント差を見ると、米国と豪州の差と豪州と英国の差が共に 0.1、英国と日本及び韓国の差が 0.3 である。以上のことから、一般学生は「生活しやすさ」に関して、米国を最も評価しているものの、その他の国との間に大きな差はなく（最も高い評価の米国 3.5 と最も低い評価の日本と韓国 3.0 のポイント差は 0.5 しかなく）、全体的には中程度の評価（5 カ国すべてが 3 点台）であることが読み取れる。日本の評価が高くないのは、日本における外国人（中国人）差別に関するマスメディア等の報道の影響があるのかもしれない。

日本語専攻学生に「F. 生活しやすさ」の評価を聞くと、最も評価するのは日本の 3.8 であり、次いで米国 3.3、英国 3.0、豪州 2.9、韓国 2.7 と続いている。ポイント差は、日本と米国の差が 0.5、米国と英国が 0.3、英国と豪州が 0.1、英国と韓国が 0.2 差となっており、日本と日本以外の国の差が比較的大きい（最も高い評価の日本 3.8 と最も低い評価の韓国 2.7 のポイント差は 1.1 であり、一般学生の 0.5 の倍以上）。日本語専攻学生は、日本語を修得していることや専攻での学習を通して、日本の生活や文化について理解が深まっていることから、「生活しやすさ」という点で日本を高く評価するのは当然であろう。

## G. 生活の安全

次に、「G. 生活の安全」の評価項目を見てみよう。まず、一般学生の評価で最も高いのは豪州 3.6 であり、次いで英国 3.5、そして米国、日本、韓国が並んで 3.1 と続いている。ポイント差を見ると、豪州と英国の差は 0.1、英国と米国、日本、韓国の 3 カ国との差が 0.4 となっている。一般学生は「生活の安全」に関して、豪州（3.6）を最も評価しているが、最も評価の低い 3 国（3.1）とのポイント差は 0.5 であり全体的に大きな差はなく、総じて中程度の評価（3 点台）となっている。ここでは特に、一般学生にとって日本が米国や韓国と並んで評価が低いことに注目したい。すなわち、従来、日本留学は、生活費は高いものの生活環境は安全であるという点が長所と考えられてきたが、中国の一般学生の間では、そのような評価がされていないことがわかる。犯罪に関する国際的な比較データを見れば、いかに日本が他の国々より安全であるかは一目瞭然であるが、その情報が海外にきちんと伝わっていない（情報発信力不足）ために、米国や韓国と共に低い評価しか得られなかったと思われる。逆に、豪州の「安全」を売りにした豪州留学キャンペーンは大きな成果を収めているといえる。

日本語専攻学生に「G. 生活の安全」の評価を聞くと、最も評価するのは日本 3.9 であり、次いで英国と豪州が並んで 3.5、そして韓国 3.1、米国 2.7 と続いている。ポイント差は、日本と英国及び豪州が 0.4、英国及び豪州と韓国が 0.4、韓国と米国が 0.5 差となっている。最も高い評価の日本 3.9 と最も低い評価の米国 2.7 のポイント差は 1.2 と大きく、一般学生の評価と比べると大きな違いが見て取れる。また、一般学生の日本への評価（3.1）と日本

語専攻学生の日本への評価(3.9)を比べると、その差は0.8ポイントとやや大きく、その他の国々に対する一般学生と日本語専攻学生間の評価の差が小さい(最大でも米国の0.4差)ことから、日本語専攻学生の日本での生活の安全に関する評価の高さが顕著である。これも前述の「生活のしやすさ」と同様に、日本語専攻学生は専攻での学習を通して、日本の生活に関する情報を多く得ていることが要因であろう。

#### H. 成熟した経済社会への魅力

一般学生の「H. 成熟した経済社会への魅力」に対する評価は、最も高いのが米国4.4であり、次いで英国4.1、豪州3.8、日本3.7、韓国3.2と続いている。ポイント差を見ると、米国と英国が0.3、英国と豪州が0.3、豪州と日本が0.1、日本と韓国が0.5差となっている。最も高い評価を得ている米国と次いで高い英国(4点台)、中程度の豪州と日本(3点台後半)、低い評価の韓国(3点台前半)の3つのグループに分けられる。

日本語専攻学生の「H. 成熟した経済社会」の評価を見ると、最も高いのは米国と日本で共に4.5であり、次いで英国4.4、豪州4.0、韓国3.2と続いている。ポイント差は、米国及び日本と英国の差が0.1と僅かであり、英国と豪州が0.4、豪州と韓国が0.8と比較的大きくなっている。最も評価の高い米国及び日本と僅差の英国(4点台中盤)、中程度の豪州、評価の低い韓国(3点台)の3つのグループに分けられる。一般学生と比較すると、日本への評価に違いが大きく(0.8差)、米国と同じく最も高い評価をしている(英国や豪州よりも高い)。日本語専攻学生は一般学生に比べると、専攻の学習等を通じて、日本の経済社会への魅力をより強く感じているのであろう。

#### I. 大衆文化への魅力

一般学生の「I. 大衆文化への魅力」に対する評価を見ると、最も高いのが米国4.2であり、次いで英国4.0、日本3.6、豪州3.5、韓国3.4と続いている。ポイント差を見ると、米国と英国が0.2、英国と日本が0.4、日本と豪州、豪州と韓国がそれぞれ0.1差となっている。最も評価の高い米国と次いで高い英国(4点台)、中程度の評価の豪州、日本、韓国(3点台)と2つのグループに分けられる。

日本語専攻学生の「I. 大衆文化への魅力」の評価を見ると、最も評価するのは米国で4.2、次いで日本の4.1であり、英国4.0、韓国3.6、豪州3.4と続いている。ポイント差は、米国と日本、日本と英国の差がそれぞれ0.1であり、英国と韓国が0.4、韓国と豪州が0.2となっている。最も評価の高い米国と僅差の日本と英国(4点台)、中程度の評価の韓国と豪州(3点台中盤)の2つに分けられる。一般学生、日本語専攻学生ともに「大衆文化への魅力」を最も評価するのは米国であるが、日本語専攻学生の評価では、英国よりも日本、豪州よりも韓国の評価が高く、一般学生よりもアジア圏の国の大衆文化への魅力を強く感じていることが見て取れる。

## J. 言語的負担の少なさ

一般学生の「J. 言語的負担の少なさ」に対する評価を見ると、最も高いのが米国 4.1 であり、次いで英国 4.0、豪州 3.7、日本 3.2、韓国 3.0 と続いている。ポイント差を見ると、米国と英国が 0.1、英国と豪州が 0.3、豪州と日本が 0.5、日本と韓国が 0.2 となっている。最も評価の高い米国と僅差の英国（4 点台）、中程度の評価の豪州（3 点台中盤）、評価の低い日本と韓国（3 点台前半）と大きく分けて 3 つのグループに分けられる。同じ英語圏でも、米国と英国はわずか 0.1 ポイント差であるのに対して、豪州は米国とは 0.4 ポイント、英国とは 0.3 ポイントの差がある。これは中国における英語教育で米語教育が優勢であること、そして豪州の英語に対して、アクセントへの意識があることの反映であろう。

日本語専攻学生の「言語的負担の少なさ」の評価を見ると、最も評価するのは米国で 4.2、次いで英国の 4.1 であり、豪州の 3.9、日本の 3.6、韓国の 3.3 と続いている。ポイント差をみると、米国と英国の差は 0.1 であり、英国と豪州が 0.2、豪州と日本、日本と韓国がそれぞれ 0.3 となっている。日本語専攻学生であっても、「言語的負担の少なさ」としては英語圏の国々が高い評価を得ており、一般学生の日本（語）への評価（3.2）と日本語専攻学生の日本（語）への評価（3.6）を比較しても、差は大きくない（0.4 差）。中国の学生にとって、言語的負担が少ないのは早くから学習している英語であり、日本語を専攻している学生であっても、日本語の言語的負担は一般学生と期待していたほど大きな違いは見られない。ここには、中国における根強い英語重視の動向が反映されていると考えられる。

## K. 入国ビザの取得しやすさ

一般学生の「K. 入国ビザの取得しやすさ」に対する評価を見ると、最も高いのが米国と豪州で共に 3.4 であり、次いで英国と日本が並んで 3.2、韓国が 3.1 と続いている。ポイント差を見ると、米国及び豪州と英国及び日本が 0.2、英国及び日本と韓国が 0.1 差となっている。最も高く評価されている米国及び豪州と最も評価が低い韓国のポイント差は 0.3 と差が小さく、一般学生の入国ビザの取得しやすさに対する評価は、5 カ国に大きな差はないといえる。中国において、外国へ入国するためのビザ取得は、全体として容易ではないという意識が強いことを反映していると思われる。また、2001 年の同時多発テロ以降、米国のビザ発給が制限されたことの影響がまだ残っており、米国の評価は低いと思っていたが、最近の急速なビザ緩和政策（政策転換）が功を奏してか、米国の評価は予想外に高かった。

日本語専攻学生の「K. 入国ビザの取得しやすさ」の評価を見ると、最も高いのが豪州、日本、韓国の 3 カ国で共に 3.4、次いで米国の 3.0 であり、英国が 2.9 と続いている。ポイントの差を見ると、上位 3 カ国（豪州・日本・韓国）と米国は 0.4、米国と英国は 0.1 となっている。一般学生と比較してみると、豪州以外の国々の評価の順位が大きく違うことが見て取れる。一般学生が最も評価するのは米国と豪州であるのに対し、日本語専攻学生が最も評価するのは豪州、日本、韓国となっており、一般学生が日本と同程度に評価した英国は、日本語専攻学生では最も評価が低く（2.9）、日本（3.4）との差は 0.5 ポイントであ



る。全体的に一般学生は英語圏の国々に対して、日本語専攻学生はアジア圏の国々に対してビザの取得が容易であるという意識を持っていることがうかがえる。

#### L. 入学しやすさ

一般学生の「L. 入学しやすさ」に関する評価を見ると、最も高いのが米国と豪州の 3.3 であり、次いで英国 3.2、日本 3.1、韓国 3.0 と続いている。ポイント差を見ると、米国及び豪州と英国、英国と日本、日本と韓国がそれぞれ 0.1 となっている。米国及び豪州が最も高く評価されているものの、最上位と最下位の差がわずかに 0.3 ポイントであることから、一般学生の 5 カ国に対する「入学しやすさ」の評価に大きな違いはない。中国の著名大学の学生は、激しい受験競争を勝ち抜いてきており、学力や知識の高さには自信を持っていて、海外の大学への学力審査に対しても不安感が少ないのではないかとと思われる。

日本語専攻学生の「L. 入学しやすさ」の評価を見ると、最も高いのは日本で 3.5、次いで豪州及び韓国の 3.3 であり、米国 2.9、英国 2.8 と続いている。ポイント差は、日本と豪州及び韓国は 0.2、豪州及び韓国と米国は 0.4、米国と英国は 0.1 となっている。一般学生と比較すると、日本語専攻学生が日本の大学への入学しやすさを高く評価することは当然のことと考えられるが、それ以外の国々とのポイント差が大きくないことは一考に値する。日本のほとんどの大学における留学生入学審査が大学で実施される入試の受験を前提としていること（母国にいながらにして出願し、書類審査による合否判定を受けられない）が影響していると思われる。また、ここでも前項の「入国ビザの取得しやすさ」と同様に、全体として、一般学生は英語圏の国々を高く評価する（入学しやすいという意識を持つ）傾向があり、日本語専攻学生はアジア圏の国々を高く評価する傾向がある。

#### M. 親族・知人の人脈の有無

最後に、「M. 親族・知人の人脈の有無」の評価項目を見てみよう。まず、一般学生の評価を見ると、最も高いのは米国 2.4 であり、次いで英国、豪州、日本の 3 カ国が 2.2、そして韓国 1.9 と続いている。ポイント差を見ると、米国と英国、豪州、日本が 0.2、3 カ国と韓国が 0.3 となっている。5 カ国とも 2 点台と低く、全般的に中国人学生で留学に関する親族や知人の人脈を持っているものは少ないといえる。

日本語専攻学生の「M. 親族・知人の人脈の有無」の評価を見ると、最も高く評価するのは日本で 2.3、次いで米国の 1.8、韓国及び豪州の 1.7、英国の 1.6 となっている。ポイント差を見ると、日本と米国は 0.5、米国と韓国及び豪州は 0.1、韓国・豪州と英国は 0.1 となっている。日本語専攻学生の留学に関する親族・知人の人脈の有無については、全体的に低い（日本以外は 1 点台）が、その中でも日本の評価が高い（2.3）。日本語を専攻するという決断をした時点で日本に関する親族・知人からの何らかの影響があったというものが、ある程度いたのではないかとと思われる。

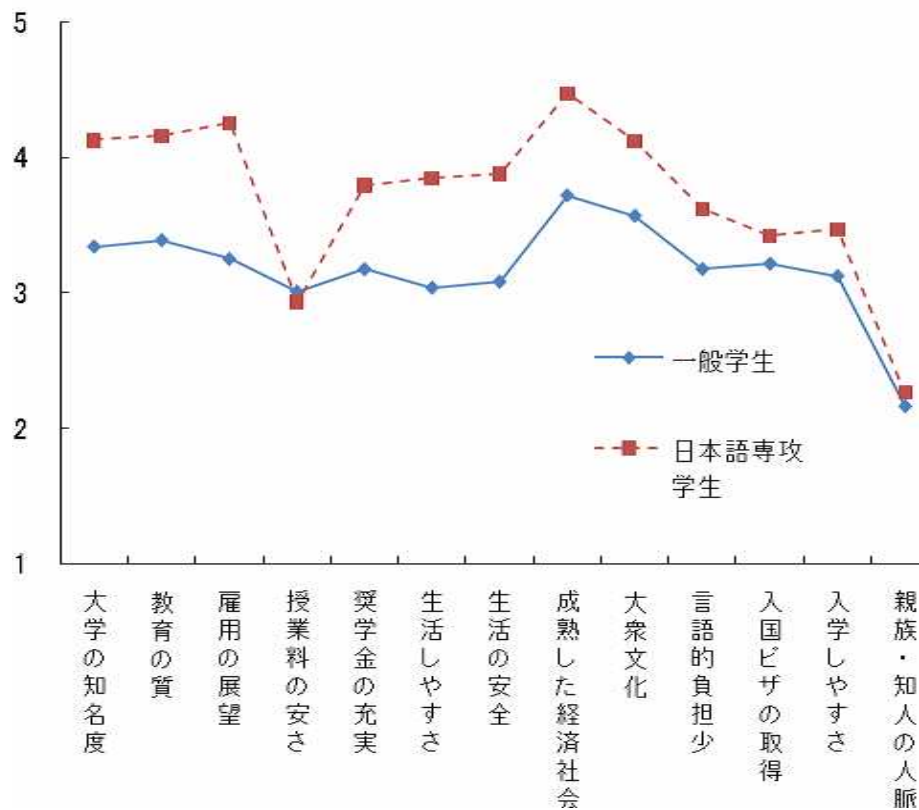
## 2. 日本留学魅力度に関する加重平均の比較

～一般学生と日本語専攻学生の項目毎の比較～

表2 - 2 - 3 一般学生と日本語専攻学生の比較

設問		一般学生	日本語専攻
A	大学の知名度	3.3	4.1
B	教育の質	3.4	4.2
C	雇用の展望	3.2	4.3
D	授業料の安さ	3.0	2.9
E	奨学金の充実	3.2	3.8
F	生活しやすさ	3.0	3.8
G	生活の安全	3.1	3.9
H	成熟した経済社会	3.7	4.5
I	大衆文化	3.6	4.1
J	言語的負担少	3.2	3.6
K	入国ビザの取得	3.2	3.4
L	入学しやすさ	3.1	3.5
M	親族・知人の人脈	2.2	2.3

図2-2-3 一般学生と日本語専攻学生の比較



前項で述べた海外留学先を選ぶ際の要因となるであろう13項目に関する5カ国の評価を特に日本に絞って、一般学生と日本語専攻学生間の評価を比較してみたのが、表2-2-3および図2-2-3である。全体的な傾向としては、いずれの項目についても、一般学生よりも日本語専攻学生のほうが、日本について高い評価を示していることがわかる。

まず、「A.大学の知名度や学位」を見ると、一般学生は3.3、日本語専攻学生は4.1となっており、その差は0.8ポイントで日本語専攻学生の評価が高い。「B.教育の質の高さ」を見ると、一般学生は3.4、日本語専攻学生は4.2となっており、その差は0.8ポイントで、日本語専攻学生の評価が高い。「大学の知名度や学位」と「教育の質の高さ」に対する評価は、ともに日本語専攻学生のほうが一般学生より同程度(0.8)高くなっている。「C.雇用の展望」を見てみると一般学生は3.2、日本語専攻学生は4.3となっており、その差は1.1ポイントで日本語専攻学生の評価が高い。日本語専攻学生は日本語を修得することで日系企業での就職が有利になるという意識を持っていると推測できる。次に、13項目の中で唯一、日本語専攻学生が一般学生よりも高く評価しなかった「D.授業料の安さ」について見てみたい。一般学生は3.0、日本語専攻学生は2.9となっており、その差はわずか0.1ポイントながら、一般学生のほうが評価が高い。つまり、日本語専攻の学生であっても日本の大学の授業料についての評価が低いということは注目すべき点であろう。日本の大学は75%が私立大学であり、中国で積極的に留学生リクルーティングを行っているのも私立大学がほとんどであり、それらの大学の授業料に関する情報が影響しているのかもしれない。「E.奨学金の充実の程度」を見ると、一般学生は3.2、日本語専攻学生は3.8となっており、その差は0.6ポイントであり、ポイント差は期待したほど大きくない。前述のとおり、日本は他の先進国に比べて、国費留学生の割合が高いだけでなく、学習奨励費や学費減免制度などのほかにも、各大学が独自に留学生に対する様々な学費減免措置や奨学金を提供するなどの策を講じている。しかしながら、それら経済的支援に関する情報がきちんと海外に(最大の日本への留学生供給国である中国でさえ)伝わっていないことが、「授業料の安さ」に対する低い評価と共に、「奨学金の充実の程度」が高く評価されていない結果に影響しているであろう。また、日本の奨学金のほとんどが大学に入学してからでなければ、申請できないことも、このような結果に反映していると思われる。「F.生活しやすさ」を見ると、一般学生は3.0、日本語専攻学生は3.8となっており、その差は0.8ポイントと比較的大きい。前述の通り、日本語専攻学生は専攻での学習を通して、日本の生活や文化について理解がより深まっていることが予測され、「生活しやすさ」という点で日本を高く評価するのは当然であろう。「G.生活の安全」を見ると、一般学生は3.1、日本語専攻学生は3.9となっており、その差は0.8ポイントとなっており、先の「生活しやすさ」と同じポイント差である。「生活のしやすさ」「生活の安全」の両方とも、授業料や奨学金に対する評価と同様に、海外での情報提供を積極的に行うことで、日本の評価を高めることは可能であると思われる。「H.成熟した経済社会への魅力」を見ると、一般学生は3.7、日本語専攻学生は4.5となっており、その差は0.8ポイントとなっている。ポイント差は他の項目と大

きな違いはないが、項目別に比較してみると一般学生、日本語専攻学生ともに日本の経済社会の魅力を最も高く評価していることが読み取れる（日本の経済社会の成熟度に関する情報は中国にもよく伝わっているといえる）。「I. 大衆文化への魅力」を見ると、一般学生は3.6、日本語専攻学生は4.1となっており、その差は0.5ポイントとなっている。「成熟した経済社会の魅力」と同様、日本語専攻学生だけではなく、一般学生も日本の「大衆文化への魅力」を比較的高く評価している。日本のポップカルチャーが中国でも浸透していることがうかがえる。「J. 言語的負担の少なさ」を見ると、一般学生は3.2、日本語専攻学生は3.6となっており、その差は0.4ポイントとなっている。ポイント差は期待していたほど大きくなく、一般学生にとっても日本語専攻学生にとっても、日本へ留学する際の言語的負担にそれほど大きな差はないということは興味深い点である。中等教育から高等教育にかけて、入学や卒業試験を含め英語が重視されていることの反映といえる。「K. 入国ビザの取得しやすさ」を見ると、一般学生は3.2、日本語専攻学生は3.4となっており、その差は0.2ポイントと僅かであり、ともに評価は高くない。一般学生、日本語専攻学生ともに、日本入国ビザの取得の困難さは同程度の評価といえる。英語圏を中心に中国人学生に対してのビザ発給率が高くなってきている状況があり、日本も入管政策を見直し（特にビザ申請手続きの簡素化と審査基準の明確化）発給率を上げる方向で対処しなければ、さらに評価は低くなると思われる。「L. 入学しやすさ」を見ると、一般学生は3.1、日本語専攻学生は3.5となっており、その差は0.4ポイントである。この差は必ずしも大きいとは言えず、日本語専攻学生を含めて日本の大学への入学に関する十分な情報やサービスが提供されていない実態を反映しているのではないだろうか。前述のとおり、留学生受入れ先進国では、留学希望者が母国にいながら出願し、書類審査のみによる合否判定を受けるのが一般的であるにもかかわらず、日本の場合は大学で実施される入学試験を受けることが前提となっていることが影響しているといえる。渡日前入学許可の推進が求められる。「M. 親族・知人の人脈の有無」を見ると、一般学生は2.2、日本語専攻学生は2.3となっており、その差は0.1ポイントとしかなく、ともに評価は低い（13項目中最も低い評価）。日本語専攻学生を含めて、全般的に中国人学生で海外留学に活用できるような親族や知人の人脈を持っているものは少ないといえる。

以上のとおり、日本留学に関する魅力度の評価は、日本語専攻学生と一般学生の間とで13項目中8項目（AからCとEからI）で、0.5ポイント以上の差が見られる。日本語専攻学生の間では特に「大学の知名度や学位」「教育の質」「雇用の展望」「成熟した経済社会」「大衆文化」の点で高い評価を得ている（4点台）。日本語専攻として、日本語だけでなく日本の社会、文化、経済等を勉強していることで、日本に対する情報を多く得たり、日本の大学や学問について深く知るようになったりすることを通して、日本留学の動機づけが高まることが期待される。このことから、中国人留学生のリクルーティングについては、以下の点が指摘される。まず第1に、日本語専攻学生については、日本留学に関するある程度の意識と知識を有していることが前提となり、日本語能力が高いものや日本の社会、

文化、歴史、経済等についての理解が高い留学希望者については、日本の大学が受け入れる際にもその点を積極的に評価することが重要であろう。その意味では、第2点目として、日本語専攻の学生とそれ以外の学生とでは、受入れにあたってのシステムや準備教育に関し、必ずしも同じものを適用するのではなく、それぞれの特性や経験にあった制度（たとえば、編入学や推薦入学制度）や日本国内での対応を図る必要があると考える。さらに、第3点目として、今後は、そうした日本語・日本文化や日本に関する学問に興味を持つ中国人学生たちの中国国内での教育に関する需要に的確かつ柔軟に対応することが、従来以上に重要になる。欧米各国の文化・留学振興機関はもとより、今日、アジアでも、中国が国家プロジェクトとして展開している孔子学院、韓国の世宗学院のように、一方では、留学生を積極的に送出しながら、自国の言語や文化の海外での普及を図り、魅力度を向上させようとする施策がとられている。こうした他国の動向もふまえつつ、日本もその魅力度を含め日本留学の誘因となるような情報発信を積極的に行うことが必要だと考える。

<文責：太田 浩、杉村 美紀>